

【近現代史シンポジウム：基調講演】

「終戦をめぐって」

平成 28 年 2 月 26 日

防衛研究所戦史研究センター

庄 司 潤 一 郎

はじめに

1 先の大戦の性格・期間をめぐって

起点：満州事変（昭和 6 年）、盧溝橋事件（12 年）、第二次世界大戦（14 年）、真珠湾攻撃（16 年）

終点：ポツダム宣言受諾通告（昭和 20 年 8 月 14 日）、玉音放送（8 月 15 日）、降伏文書調印（9 月 2 日）、対日平和条約調印（27 年 4 月） → 戦闘の継続（～9 月 5 日）

→「先の大戦（戦争）」、対象とすべき「過去」の意味づけ・・・戦争の呼称の問題

2 日独両国における戦争終結をめぐる議論の相違

日本：「終戦」VS「敗戦」

ドイツ：「（ナチズムからの）解放」VS「敗北（崩壊）」→主体・時期・責任の明確化

3 「終戦」をもたらした要因ードイツ（ベルリン陥落）との相違ー

1) 戦争目的の限定ー「国体護持」ー

「国体を護持し皇土を保衛し征戦目的の達成を期す」（「今後採るべき戦争指導の大綱」、昭和 20 年 6 月 8 日）

\* 「たとえ勝者が完全かつ永遠に自由に振る舞えるとしても、敗者は、自己の中核的価値を傷つけられないと感じれば、戦いをやめる決断をする」（Paul Kecskemeti, *Strategic Surrender: The Politics of Victory and Defeat*, Stanford Univ. Press, 1958）

2) 日米間の「信頼関係」と「コミュニケーション」の存在

＜日本＞早期和平への動きと米国に対する信頼

「国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方（米国）は相当好意を持っているものと解釈する」（昭和天皇）

\* 「19 世紀以来日米は基本的な姿勢や役割が類似していたからこそ、戦争という極端な敵対関係にもかかわらず、以前の形態に回帰することによって、戦後日米関係への推移が比較的スムーズだった」（入江昭）

＜米国＞「知日派」（ジョセフ・グルーなど）の存在

「敗戦のなかの僥倖」（五百旗頭真）

### 3) 本土決戦の可能性に対する日米の認識ギャップ

<日本>本土決戦構想の破綻と昭和天皇の軍に対する「不信」

・「従来勝利獲得の自信ありと聞くも、計画と実行が一致しないこと、防備並びに兵器の不足の現状に鑑みれば、機械力を誇る米英軍に対する勝利の見込みはないことを挙げられる」（「昭和天皇実録」）

・「聖断は下されたり 即ち、今後の作戦に御期待なし・・・畏れながら、御上のお気持は、御前の会議の論争の帰結として、生じたるものにあらざるべし（想像）、要するに今後の作戦に御期待なきなり、換言すれば、軍に対して御信用無之也・・・累積したる対軍不信感の表現なり 此の不信感が、恐れ多くもお上御一人の大御言葉として直接表現せられたり」（川邊虎四郎参謀次長）

<米国>対日本本土上陸作戦（「ダウンフォール作戦」）における人的損害への懸念

・「ひとたび日本本土への上陸作戦と軍事力による占領を始めれば、おそらく最後の兵の死に至るまで抵抗にあう」（スティムソン陸軍長官）

\* 「理論的分析によれば、敗者側の強力な残存兵力は、降伏を促すため敗者に政治的譲歩を行うよう勝者を導くことにより、勝者を実質的に軟化させる効果を生み出す」

（Kecskemeti, *Strategic Surrender*）

\* 「太平洋の戦場で米軍に多大な犠牲を強いた日本の戦力と戦闘は、幾つかの政治的目標を達成したのである。日本の敗北はある種の勝利であった」（John Ferris）

### 4 「終戦」のもたらした遺産—戦争終結の態様として—

1) 政権の正当性の問題→中国：国共内戦、朝鮮半島：分断

2) なし得なかった自力による解放（「惨勝」）＝×＝独ソ、東南アジア（フィリピン、ベトナムなど）

・ 「屈辱」に対する憤激とその回復

中国：「国恥」、韓国：「恨」

・ 日本側：敗北感の欠如＝むしろ対米戦としての記憶

3) 曖昧な「戦勝」（戦後秩序における戦勝国の優位）の意味

・ 冷戦とアジアからの断絶→戦後処理の遅れ（1965年日韓基本条約、1972年日中共同声明）

・ 日本の経済大国化＋中韓両国の混乱＝「勝者と敗者の立場の逆転」（高坂正堯）

\* 明確な「勝利」と占領＞謝罪・賠償→戦争の「清算」に影響＝「和解」を左右

おわりに